

宍道湖の鹹度問題 (五)

小 牧 實 繁

斯くの如くにして風土記編纂時代南妙見山方面より北杵築方面に延びる砂丘及び砂嘴（之れも砂丘であつたかも知れぬ事前述の如し）が存在した事、其の背後東方に當り之れによつて杵築海と隔てられた半鹹半淡の潟が存在した事、更に其の東方に沖積平野が發達し、之れには既に現今の標高五米以下の低地に至るまで一部聚落が發達し多少の神社が存在した事等が明瞭になつたと思ふ。

若し以上の如き事實を認めるならば如何にして野津氏の考へられる如く出雲風土記編纂時代に至るまで宍道湖と杵築海とが鹹水を以て相連絡して居た等と考へる事が出来やうか。

なる程、出雲風土記、島根郡の條には「凡南入海所在雜物 入鹿、和爾、鰯、須受枳、近志

呂、鎮仁、白魚、海鼠、鯧鰕、海松、等之類至多、不可盡名」とあるから、此の入海を宍道湖と考へるならば、當時宍道湖には、いるか、鰻（出雲風土記考證一二七頁によれば和爾は出雲の方言で鰻の事である）、このしろ、なまこ、みる等の海産動植物を産した事になり、宍道湖は鹹水であつたことになる。然しながら此の入海が直ちに宍道湖であると速断してはならぬ。事實此處に言ふ入海は宍道湖と中海との兩者を指して居るのである。之れは風土記を前後通讀すれば甚だ明瞭な事實である。即ち風土記意宇郡、野代川、玉作川 來待川、宍道川の條に見える入海は宍道湖であるけれども、同郡、伯太川、飯梨河、筑陽川、意宇川の條に見える入海は中海であり、同郡眞名猪池の條の次に「北入

海」とある入海は前後の關係上中海と宍道湖との兩者(寧ろ一水面と見て居る)を指し、又た意宇郡最後の條に「前件一郡入海之南」とある入海も中海と宍道湖とを指す事明かで、從つて島根郡の條に「凡南入海所在雜物云々」の入海は中海と宍道湖との兩者を指す事は又甚だ明かな事實である。然れば此の入海に上記の如き海產動植物を産するとの記事があつたと直ちに宍道湖が當時海水であつたと早急に決定する事は出來ぬ。若し假りに、いるか、鮫、このしろ、なまこ、みる等は中海の部分に産し、鰯、鱈、鎮仁、白魚、鯧鰈(鰈は海產かも知れぬ)等は宍道湖の部分に(中の海の部分にも勿論)産したものであらうと考へるならば、後部類の動物は半鹹半淡は勿論時としては淡水にも産するものであるから、宍道湖は鹹水であつたと直ちに言へない事になる。否寧ろ絶對に鹹水ではなく恐らく半鹹半淡であつたと思はれるのである。

其れは秋鹿郡の條に「南入海 春則有鰯魚、

須受枳、鎮仁、鯧鰈等大小雜魚、秋則有白鵠、鴻雁、鳧鴨等鳥」とある記事によつて明かである。秋鹿郡の條に所謂南入海の入海は宍道湖のみを指す事、本郡の地理的位置から推して明かであるが、此所の產物に前記の海產動植物たるいるか、鮫、このしろ、なまこ、みる等を擧げて居ないのは、此の部分が海でなかつた確證とはならないにしても、當時、中の海と宍道湖とは全く產物を同一にした譯でなく多少之れを異にして居た證據にはなると思はれ、其れは鹹度の相異による所が多いと考へられるのである。斯く考へるのが事實に當つて居るか居ないかは明かでないとして、少くとも斯く考へても不合理ではないと思ふ。

之れを鰯魚、鱈、鎮仁、等の習性に考へても之等は半鹹半淡時としては淡水にも生息するものであるから、宍道湖は當時半鹹半淡であつたと考へても少しも不合理ではなく、宍道湖が中海(宍道を包括する)と產物を異にし海產物を産

しなかつた事と併せ考へると宍道湖はごうも半鹹半淡であつたのでないかと思はれるのである。要するに宍道湖は中海と連絡はして居たが鹹水ではなかつたものと思はれる。然るに之れがどうして杵築海と鹹水を以て相連絡して居た等と考へる事が出来やうか。

若し宍道湖が杵築海と相連絡し鹹水であつたとすれば、中海と同様の海産動植物を産したに違ひなく、秋鹿郡の條に入海(宍道湖)の産物として擧げたものの中に中海及び宍道湖に當る島根郡の條の入海の産物と同様の海産物も見出さるべきである。然るに其の事のないのは明かに宍道湖と杵築海とが海水を以て相連絡して居なかつた一證で、之れ前節に於いて地形の状態並びに聚落及び神社の分布より宍道湖及び杵築海間に出雲風土記編纂時代既に陸地が存在して兩者相連絡しなかつたであらうとした推論と相照合すべき點である。

勿論當時の宍道湖は現今の宍道湖に比し鹹度が幾分大であつた事明かである。即ち出雲大川

即ち斐伊川は神門水海に入り西杵築海に注いで居た事、出雲風土記の記事(出雲郡、出雲大川の條、同箇の條)によつて明かであるから、宍道湖が淡水の供給を受ける事は現今よりも遙かに少であつたと思はれる上に、其の相連絡して居た中の海には、現今の如く之れと日本海とを相隔てる夜見濱の大砂嘴は存在せず、現今の大砂嘴は當時未だ夜見島で(出雲風土記島根郡蜈蚣島の條)、中海は現今よりも遙かに自由に大海と相連絡して居た事實が、同風土記の記事(同條)から推測せられるから、之れと相連絡して居た宍道湖が現在より遙かに大なる鹹度を有して居た事は否む事が出来ぬ。又た事實、風土記意宇郡の條には「鹽楯島有蓼螺子」とあり、之れによつて現今の馬潟の瀬戸にある手間天神の島邊に味辛き長辛螺(ナガシン)(出雲風土記考證八二頁に、蓼螺子は長辛螺のことであつて、味が辛いから蓼螺子とも辛螺子とも書く、となす、言海には苦螺、腸の辛き事蓼の如し、海生、蓼螺に同じとなす)を産した事を知り、又た同郡野代海中

蚊島の條には「周六十歩、四方並磯、其磯有螺子、海松」とあり、之れによつて又蚊島即ち現今の嫁島附近にも海水産の螺子や海松を産した事を知るから（勿論螺子は淡水産のものであるかも知れぬが海松と共に産する以上は海産とすべく、これも蓼螺子であらう）宍道湖は當時鹹度が甚だ大であつたと言はなければならぬ。

然しながら此等は何れも宍道湖も中海に近い部分及び中海との連絡水道中の産物である。然れば假令此等が海産性のものであるにしても之れを以て直ちに當時宍道湖が全部海水であつたとは云へぬ。即ち此等は宍道湖も中海に近い部分には産したかも知れないが其の西方奥部にも一樣に産したか否かは不明であり、前述の如く秋鹿郡の條の入海には産物として斯かる海産物は擧げられて居ないから、宍道湖は、其の中海に近い部分は兎も角、奥部は鹹水では無く半鹹半淡であつたと見るのが至當である。

要之宍道湖の鹹度は出雲風土記編纂時代には現今に於けるより遙かに大であつた事は明か

であるが全くの海水であつたとは考へられない。恐らく半鹹半淡であつたであらう。其れは中海との連絡水道が甚だ狭少であり且つ四周より宍道湖中に注入する河川が數多存在して居たと云ふ事實より第一に考へ得る所であり加之其の産物が湖水の半鹹半淡であつた事を暗示して居る之れが鹹水を以て杵築海と相通じて居た等とは如何なる點よりしても考へ難い。

而して出雲風土記編纂時代より古く溯つた時代に於いては鹹度が更に大であつた等とも一概には考へられない。地形上より斐伊川が其れ以前に於いて絶對に宍道湖に入らなかつたとは斷言出来ない事である。然すれば其れ以前に於いても宍道湖は更に鹹度の小であつた事があり得た事になる。私は斯かる時代もあつたものと考へ其の時代には宍道湖にも蜆を産したもので宇灘貝塚發見の蜆貝及び現今宍道湖産の蜆貝は皆同一系統のものではなからうかと考へ度い。貝塚築成時代に於いて宍道湖が斯かる情態にあつたか否かは未だ不明であるが斯かる情態にあつ

たかも知れぬと云ふ事だけは考へられる。宍道湖を宇灘貝塚發見蜆貝の獲得せられた可能性ある水面の一に數へる事が全く不合理でもない事は此れによつても明かである。(但實際は宍道湖より得られたと考ふべき事勿論である。)

色々解決しなければならぬ問題が寧ろ甚だ多いのを知るのであるが、今日は未だ之れを解決し得る手掛りとなるべき材料が不充分であるから暫く比較的確からしいと思ふ點だけを述べて本稿は一先づ擱筆し、其の他の問題に就いては尙將來の研究を俟つ事とし度い。自分は目下此の問題のみに没頭して居られない事情にあるから同志の士が色々研究を進められん事は眞に切望に堪えない所である。(一九二七・六・三稿了)

〔補遺〕本論文稿了後、「島根縣舊藩美談」を再讀して、宍道湖沿岸の古地理を考ふるに當つては尙同書第六篇第二章、第九篇第一章、第十篇第一章第二章、第十二篇第一、第二、第三章等を參考すべき事を知つた。此等諸章に説述する所が如何なる點に於いて余の考へを補ひ又如何なる點で余の考へと衝突するかは更に稿を改めて論じ度いと思ふ。

註一島根縣史第二卷四八三—四八九頁。註二同、四八九頁。

宍道湖の鹹度問題

註三同、四八九—四九〇頁。註四同、四九〇頁。註五同、四九〇頁。註六同、四九〇—四九二頁。註七同、四九二頁。註八同、四九二—四九三頁。註九同、四九三—四九四頁。註一〇同、四九四—四九五頁。註十一拙稿「日本海沿岸石器時代遺跡の地理學的考察」史林第十一卷第一號第二號大正十五年一月、四月。註十二京都府史蹟勝地調査報告第二冊第三冊石川縣史蹟名勝調査報告第一輯。註十三後藤藏四郎著出雲風土記考證三五頁。註十四出雲風土記秋鹿郡條。註十五島根縣史第一卷第四七頁以下。註十六同、第四八—四九九頁。註十七同第四九九頁。註十八同、第四九—五〇頁。註十九後藤藏四郎著「出雲風土記考證」一七一頁、湖の字は天平時代にミナトと讀み、水門の意であつた。となす。註二十同書、一七四頁。

〔補遺二〕

出雲風土記意宇郡の條に「印北海有昆賣埼 飛鳥淨御原宮 御宇天皇御代丙戌七月十三日 語臣猪麻呂之女 遣逢件埼 邂逅遇和爾 所賊不歸」とある。昆賣埼は、後藤氏によれば(出雲風土記考證二三頁)安來灣の南、十神山の頂上から南へ直線で七町ばかりの處にある、との事であり、和爾は、同じく、出雲の方言にて鯨をいふ、との事で、後藤氏は「今は中海に鯨が居らぬが、天平時代には今の夜見ヶ濱も夜見島であつて、中海の鹹き度も外海に異ならず、祇神島の南にまで鯨が居たと見える」として居られるが(出雲風土記考證二三頁)余は大體に於いて之れに賛成で、之が決して余の所説と衝突しないのを知る。